

平成 29 年度

## 北近畿地域連携センター研究助成（教員プロジェクト）

### 採択課題 研究成果報告書

研究課題名：福知山市の中心市街地活性化に関する研究（1）

－外部からの交流・移住促進という視点から－

研究代表者（申請者）：平野 真

共同研究者：神谷 達夫、中尾 誠二、谷口 知弘

研究経費： 32 万円

#### 研究成果の概要：

地域における疲弊した中心市街地商店街の再活性化に向け、京都府福知山市の事例をもとに、活性化手法を検討した。研究の着眼点としては、商店街に対する消費者側の視点として、特に外部からの移住者にはまちづくりに関してどのようなニーズや要望が有るかを調べるということ、そのことに移住者や定住者を増やすという観点からは、中心市街地問題がどのように映るのか、といった問題を考えたことである。

1) 外部からの移住者が多い長田野工業団地の従業員約 1100 名へのアンケート調査を行ったところ、居住する地域の商業に対する要求としては、利便性の高い国道沿いの大店舗へ向けた需要が圧倒的に高く、それ以外の旧商店街が活躍できそうな文化的な面などに対してはあまり求めるものはあまりない、という厳しい結果となった。このことは、現時点では移住者からの視点では旧商店街の再興は商業的のみならず文化的にもかなり難しいということを示唆する結果となった。今後、古くからの福知山市民、中心市街地付近の居住者からのヒヤリングにより、内部からの再生の可能性について検討を進めたい。

2) 一方、外部者にとっての福知山の魅力を大きなものとし、交流・観光人口を増やしこれによって間接的に中心市街地の活性化につなげるため、福知山の伝統工芸である和紙、漆、藍染などを、観光資源として用いることを考えた。その可能性について、例えば体験型の研修ツアーを企画し、東京でデザイン関係者 30 名にアンケート調査を行った結果、興味を持つ人間が約 8 割と多いことがわかった。また実際に、都市部の各界の識者を 4 名モニタリングのツアーに招待して、ツアーの感想を中心にヒヤリングを行った。その結果、伝統工芸の体験研修については好評であり、ツアー全体に 10 点満点で平均 8.9 点という満足度を得ることができた。すなわち、今後こうした体験型観光を具現化し、商店街の中に観光サービスの拠点をつくることなどで、交流人口促進の方向から間接的に商店街の活性化に多少なりとも結びつけていくことが期待される。

今回の調査結果は、地域の居住人口確保ないし定住促進という立場からは、近代的な生活面からの利便性確保が重要であり、一方、外部からの交流促進や観光という立場からは、文化的資源が重要である、という側面を浮き彫りにした。従来、混在した視点で語られが

ちであったこれら 2 つの問題を明確に区別して考える必要があるということ、今後、中心市街地の活性化問題と絡めて、観光など地域の産業形成などの広い視野の中で、この問題をさらに深耕していきたい。

(なお、本研究のうち、伝統工芸のモニタリングツアーに関する部分は、福知山市役所文化振興課から別途予算により研究委託を受けたものであるが、結果について、市のご好意により本報告に併記した。)

## 1. 研究開始当初の背景、先行研究レビュー

地域における中心市街地商店街の疲弊（いわゆるシャッター商店街の発生）とその再活性化は、日本の多くの地域が抱えている典型的な地域課題のひとつである。地域商店街の疲弊問題については、大店舗法廃止による規制緩和が起こる 2000 年ごろを境に問題が顕在化し、商学や経営学の立場からその要因について様々な分析がなされている。すなわち、一般に地縁や所縁に基づく店主たちの形成する商店街は、合目的的に組織化された大企業の店舗などとは異なり、その組織的脆弱性から、集団で連携して大店舗に対抗しようとしても失敗する例が多いといわれる。このため、大店舗法廃止以降、多くの地域の商店街は急速に顧客を失い疲弊していった。特に、地方に進出した大企業の店舗は、土地代の安価な郊外に広大な店舗を構え、モータリゼーションによって広域的に顧客を獲得できたため、旧来の中心市街地に集団でモールなどを形成して対抗しようとした商店街勢力は戦略的に裏目にでたものも多かった模様である。店舗面積が大きな大型店の優勢は日本全国で共通している。

福知山市においても、由良川水運の船着場から商店の集積が始まり、新町商店街や広小路商店街など幾つかの商店街（ここでは旧商店街と呼ぶ）を形成してきたが、運送が水運から鉄道に変わり、駅正面通り商店街や駅前商店街に活気が移行し、さらにモータリゼーションによって国道沿いの郊外の土地代の安い領域に郊外型の大型店が進出するに及んで、客足は一気に旧商店街から奪われていった。一時期は、旧商店街の店主たちが団結して駅前にファミリーというショッピング・ビルを作って大店舗に対抗しようとしたが、結果的には前述の多くの例と同様、その試みは失敗に終わり、これが旧商店街の疲弊に輪をかけたといわれる。すなわち、福知山市の旧商店街の歴史も、前述した日本の多くの地域商店街のたどった道とほぼ同様の流れに沿っている。現在、旧商店街では、多くの店主たちが商店経営を諦め店舗を住宅に切り替え、旧商店街で商店を営み続けているもののほうがむしろ少ない状況となっている。

このような現実の中で、旧商店街を商業的に復活させ、以前の全盛期のような商業的賑わいを取り戻すことは非常に困難な状態である。そこで、仮に商業的にもとのように再生することが難しくとも、ここに新たな価値を発掘し、文化交流や市民が集う拠点としての意味をもたせ、以前とはまた異なる形で人の賑わいを創出し、福知山市の新たな魅力の一つとなるような工夫が出来ないか、といった点について検討することを考えた。

福知山市としては、日本の多くの地域と同様、人材流出や人口減少が大きな課題であり、外部からの交流人口や移住などを促進しようとしているが、これも特にこれといった決め

手（効果的な施策）がない状況である。そこで、旧商店街を商店経営者の側の視点ではなく、消費者、とくに外部からの移住者の視点から眺め、どのような中心市街地が外部の人にとって魅力があるのか、移住者が中心市街地に求めるものは何なのか、どのような中心市街地があれば福知山市が魅力ある地として移住や定住の対象となるのか、を調査することを考えた。

また一方、福知山市の伝統工芸である、大江丹後二俣和紙、夜久野丹波漆、福知山由良川藍染は、ともに原材料の植物栽培から行っている貴重なものであるが、産業的には皆厳しい状況がある。すなわち、製造業という産業としてみると収益性には課題が多く、後継者問題や認知度低下といった問題を抱えている。

平成 23 年(2011 年)2 月経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室の報告書「伝統的工芸産業をめぐる現状と今後の振興施策について」<sup>(13)</sup>によれば、いわゆる伝産法：伝統的工芸品産業の振興に関する法律で振興施策が考えられている 100 年以上の歴史をもつ日本の代表的な工芸品として、和紙など 211 品目が選ばれている。しかし、伝統工芸品は日本人の生活様式の変化による需要の激減や海外からの安価な輸入品の増大で産業としては衰退傾向にあり、平成 21 年度の生産額は約 1300 億円で、昭和 50 年代のピーク時の約 5300 億円に比べると約 4 分の 1 に減少している。関連企業数は約 1 万 5 千件でピーク時の 3500 件弱に比べ 2 分の 1 以下、従業員数は約 7 万人でピーク時の約 28 万人の 4 分の 1 程度となっている。漆器に関しては、平成 21 年度(2009 年)の生産額はピーク時の約 170 億円に対し約 3 分の 1、企業数はピーク時の約 4000 件に対し 2 分の 1 強、従業員数はピーク時約 2 万人の 2 分の 1 弱であり、伝統工芸全体の中では比較的減少比率は少ないほうではあるが、減少傾向は明白である。やはり中国産の安価な製品への競争力低下、収益性の悪化による後継者不足などが指摘されている。藍染についての個別データはないが、繊維製品全体では、平成 21 年度(2009 年)の生産額約 700 億円はピーク時約 4000 億円に対し 5 分の 1 以下、企業数約 4000 件はピーク時の約 18000 件に対し 4 分の 1 以下、従業員数約 2 万人はピーク時の約 18 万人に対し 9 分の 1 程度であり、当初の規模が大きいだけに減少比率はむしろ大きい。2009 年に発表された未来工学研究所「伝統的工芸品産業調査報告書平成 20 年度」<sup>(16)</sup>によれば、伝統工芸産業の関係者へのアンケート調査では、このほかに、販路開拓の難しさなども大きな障害としてあげられている。工芸品は量産ができないこと、原材料の生育に時間がかかるなど産業的に難しい面が有り、一定以下に生産量が減少すると生産工具の持続的供給も含め極端に生産維持が難しくなる。福知山市の和紙、漆や漆器、藍染の産業化や福知山ブランドの形成には、基礎的な産業規模が現状ではあまりに小さく、他の産地と比べた競争優位性も十分に育っていないと考えられる。

そこで、当面の存続の為には、製品販売だけでなく、観光資源化していくことが、逆に福知山市の観光戦略としても重要と考える。具体的には、福知山市にある和紙、漆、藍染といった 3 つの日本の伝統工芸が、ともに産業レベルとしては非常に小さいが、すべて原材料の栽培から行っているという点では、文化的には特筆すべき特徴が有る。そこで、これを観光資源化し、伝統工芸体験ツアーとして構成していくことを考える。現在、日本への海外からの観光客は増える一方であるが、単なる有名施設や景色の見学から、体験型観光や文化交流などへと、需要も質的に変化してきていると言われている。そこで、和紙、

漆、藍染の体験ツアーを民泊等と組み合わせ、福知山独自のツアーを構成して、京都への観光オプションなどとして用意していくことが考えられる。民泊の促進や、大呂自然休養村の活性化、福知山の観光促進にも役立つと考える。すなわち、伝統工芸を地元の観光資源のひとつとして考え、製造業としてではなくサービス業としての収益源としての道を開くことである。伝統工芸を観光資源として開発し、外部からの交流人口の増加に資すことができれば、伝統工芸そのものの維持・継承だけでなく、巧く行けば間接的に旧商店街の再興にも資するものとするのが期待される。そこでこのような観点からの、資源開発の可能性についても検討を行うこととした。

## 2. 研究の目的

本研究は、中心市街地商店街再活性化にむけ、将来にわたって持続可能な発展を指向した地域社会を実現するための地方都市中心市街地ランドデザインの問題として検討を行う。研究の着眼点は、疲弊した商店街周辺に残る民俗・伝統文化の蓄積や、地域社会のつながりの中で歴史的に醸成された社会的連帯感、地域独特の顧客との共生意識などといった有形・無形の資産が果たす役割である。

地域の蓄積された無形的な資産をうまく活用することにより、中心市街地商店街は、従来の経済発展を指向した商業集積モデルとは異なる新たな価値を生み出し、より精神性に重点を置いた補完型商業地域あるいは交流拠点として機能するのではないかと、という仮説を設定する。

こうした補完型商業・交流拠点としての旧商店街を包含することで、地域社会の持続可能な発展にむけた中心市街地の新たな形成モデルがありうるのではないかと、といった論点について考察する。

## 3. 研究の方法

本研究では、特に研究の進め方として、消費者、特に外部からの移住者の視点に注目し、外部からの移住者が町作りに対してなにを期待するのか、どのような町であれば移住したくなるのかといった点についてアンケート調査を行う。こうした消費者の側からの商業集積に対する要請や考え方を調査し、その中から将来にわたって持続可能となる地域の商業集積のあり方や産業としての商業のあり方について分析を行う。具体的には、福知山市郊外にある長田野工業団地で、約 6300 名の従業員・アルバイトが仕事に従事しているが、その多くは外部からの移住者や通勤者などである。そこでこうした人々にアンケート調査を行い、外部の消費者から見た商業施設への需要、商店街への期待などを明らかにする。

また、福知山に残る伝統工芸の文化的な価値に着目し、現状は産業として生き残るのが必ずしも易しくはないこうした技術を、体験型の研修ツアーとして活用し、外部者にとっての福知山の魅力づくりに繋げ、間接的に中心市街地の活性化にも資する手法を検討する。この手法に関して、実際に都市部の人間などを調査対象として需要調査をアンケート形式で行い、その可能性を検討する。

こうした外部からの移住者や外部の人々の視点から、地域や中心市街地に関する需要や希望を調べ、商店街の店主たちの意思とどのような接点を持つのかを検討する。供給側からの考え方ではなく、消費者すなわち需要側からの考えや要求から中心市街地問題を考える、というのが本研究の基本的な姿勢である。こうした調査や検討を通じて、今後地域社会が持続的発展を遂げていくのにどのような事が必要なのかを議論したい。

#### 4. 研究成果と今後の課題

##### 4. 1. 長田野工業団地でのアンケート調査

旧商店街を含む中心市街地の再活性化は、どの程度、自治体全体の中で合意形成できるものになるだろうか。福知山市の場合、興味深いのは、市の財政を支え、人口維持や出生率向上にも少なからず貢献している工業団地があるということである。長田野工業団地と呼ばれるこの工業団地は、1974年に当時の蜷川虎三京都府知事によって府北部の産業振興を目的とし、旧陸軍の演習場跡地を活用して造成を行い、工業団地として企業誘致を行ったものである。地方自治体が財源確保や人口維持を狙いとして製造業の工場を誘致した日本の工業団地の中では草分け的な存在であり、しかも珍しく成功している例でもある。その成功要因は、何と言っても立地の優位性であり、京都へも大阪へも共に1時間強で鉄道や高速道路による資材や製品の運搬ができ、旧陸軍の跡地を利用した広大な敷地の利便性は、多くの製造業企業にとって良質の工場立地としての認識を生んだ。そのため、実績が悪くなった企業は自動的に入れ替わり、企業の自然淘汰の循環の中で、長田野団地には常に一定の好実績の企業の工場が活動を続け、同工業団地概況報告(2016)によれば、現在40の企業の事業所や工場があり、従業員とアルバイト展総計で6300人ほどを抱えている。このうち約8割が福知山市に住んでいるとされ、その結果、総人口8万弱の福知山市にあって、5000人ほどの福知山市への居住を生み出している。こうした成長産業の従業員の移住により、出生率の向上や若年人口の維持、日常生活での消費などを生み出しているほか、福知山市に現在年間20億円ほどの法人関係の税収をもたらしているとされる。

こうした長田野工業団地の人々が、将来にわたっても企業内での転勤がない限り福知山に住み着いてくれ、またその子供たちの世代が福知山で就職し居住してくれるには、何が必要だろうか。これは、長田野工業団地関連に限らず、外部のものが福知山市の税収の一部を担えるような規模で一定数福知山市に移住定住し、一定の人口を維持するための基本的な条件を示唆する情報ともなる。こうした外部からの移住者を含め、財政を担う法人や市民によって、中心市街地の活性化は、どのような形が支持され、仮に公的資金が投入される場合の合意形成はどのように行われるのか、こうした課題が、福知山の中心市街地活性化問題には関係してくる。この合意形成は、言うならば日本の国レベルの中でも、比較的産業に勢いがあり経済力のある都市部の地域の人々が、比較的産業が衰退気味の地方の山間部などの地域の人々に対しどのような共感やまちづくりに関する方向性の一致を見出せるのか、という問題ともリンクしてくる問題でもある。

長田野工業団地での企業従業員およびアルバイト等の従事者総勢約 6300 名を対象に、以下のようなアンケート調査を行った。アンケートは、各企業の食堂やタイムカード入力場所など、従業員の方々がよく通る場所に、アンケートの趣旨を張り出し、アンケート用紙と回収箱を置き、協力してくれる方々に自主的に記入して頂く手法とした。そのため、いわゆる回収率的な数値は明確ではない。正確に何人の方がアンケートに眼を留め協力の有無を考えたかは定かでないためである。しかし大雑把に言えば、全調査対象者約 6300 人中、回答が回収できた数は約 1100 件であり、そうした意味での回収率概算は約 2 割弱となる。

長田野工業団地従業員へのアンケート調査の具体的内容を以下に示す。

\*\*\*\*\*

長田野工業団地の企業従業員の方へ福知山市定住促進を目的としたアンケート調査

調査者：福知山公立大学地域経営学部地域研究プロジェクトチーム

本アンケート調査は、工業団地の企業従業員の方々が定住地として地元福知山市を選んでいただけるには、どのようなまちづくりが必要であるかを考えるために、大学の研究室が主体となって意識調査を行うものです。もちろんアンケートにお答えいただけるかは皆様の自由意志で決めていただく問題ですが、福知山市が今後皆 様のご希望にそのようなまちづくりをしていくために、ご協力を得られれば、大変ありがたく存じます。

下記質問5項目に匿名でお答え頂ければ幸いです。(数分で終わります)

1. あなた様の属性 年齢 歳 性別 男・女 世帯の家族数 人 前住所地 現住所に同じ・ 都道府県 市町村

2. 現在のお住まい(該当のものを丸で囲んでください) 持ち家 ・ 賃貸 市街地 ・ 農山村地域

所在地 府県 市町村

3. 現在の通勤時間(各通勤手段での通勤時間の概算をご記入ください) 車・バイクで 分 自転車 で 分 電車、バスなどで 分 徒歩で 分

4. 居住地を選ぶうえで重視する項目を下記から重要な順番に 5 つまで記号で選んでください(つなければあるだけで結構です)。 (1) (2) (3) (4) (5)

ア)職場に近い

イ)両親など他の家族との同居ないし近くに住むこと

ウ)もともと住んでいた地域であること

エ)親戚や知り合いが多く住んでいる

オ)買い物の利便性が高い

カ)水害等・災害のリスクが少ない

キ)好みの飲食店が多い

ク)娯楽施設がある

ケ)美術館や博物館などの文化施設がある

コ)保育所や子どもの遊び場などの整備されている自治体であること

サ)子どもの学校を変えないこと

シ)子どもの進学(進学率の高い学校がある)

- ス)町の雰囲気や人柄が好き
  - セ)イベントなど楽しい行事がある
  - ソ)町や自然、旧跡など、景色の良いところがある
  - タ)その他(具体的にご記入ください: \_\_\_\_\_ )
5. 福知山市に欠けているもの、それがあれば居住したくなるものは何でしょうか? 下記の中から該当するものを、重要なものから順に 5つあげてください( 5つなければあるだけで結構です)。

- (1) (2) (3) (4) (5)
- ア)より便利なショッピングモール
  - イ)個性的な店
  - ロ)ウ)美味しい飲食店
  - エ)価格が手頃な飲食店
  - オ)娯楽施設
  - カ)美術館や博物館などの文化施設
  - キ)幼稚園・保育園
  - ク)図書館
  - ケ)アスレチックやプールなどのスポーツ施設
  - コ)進学率の高い学校
  - サ)雰囲気のいい町並み
  - シ)イベントなど楽しい行事
  - ス)景色の良いところ
  - セ)人の交流できる機会や場
  - ソ)安価な土地や住宅
  - タ)快適な居住環境(閑静な住宅街)
  - チ)その他(具体的にご記入ください: \_\_\_\_\_ )

飲食店や商店の利用についてお尋ねします。店に行くときに、店の選択で重視する項目を下記 から重要な順番に5つまで記号を選んでください( 5つなければあるだけで結構です)

- (1) (2) (3) (4) (5)
- ア)価格が安い
  - イ)他の店にはないオリジナル商品がある
  - ウ)商品が優れている(おいしい)、あるいはその店の商品に信頼感がある
  - エ)車で行きやすい
  - オ)駐車場が広い
  - カ)他の店が近くにあり、他の用事を兼ねられる
  - キ)電車やバスなどの公共交通機関で行きやすいところにある
  - ク)景色や雰囲気の良い場所にある
  - ケ)店の雰囲気が良い
  - コ)接待の仕方などサービスが良い
  - サ)店の人と仲が良い

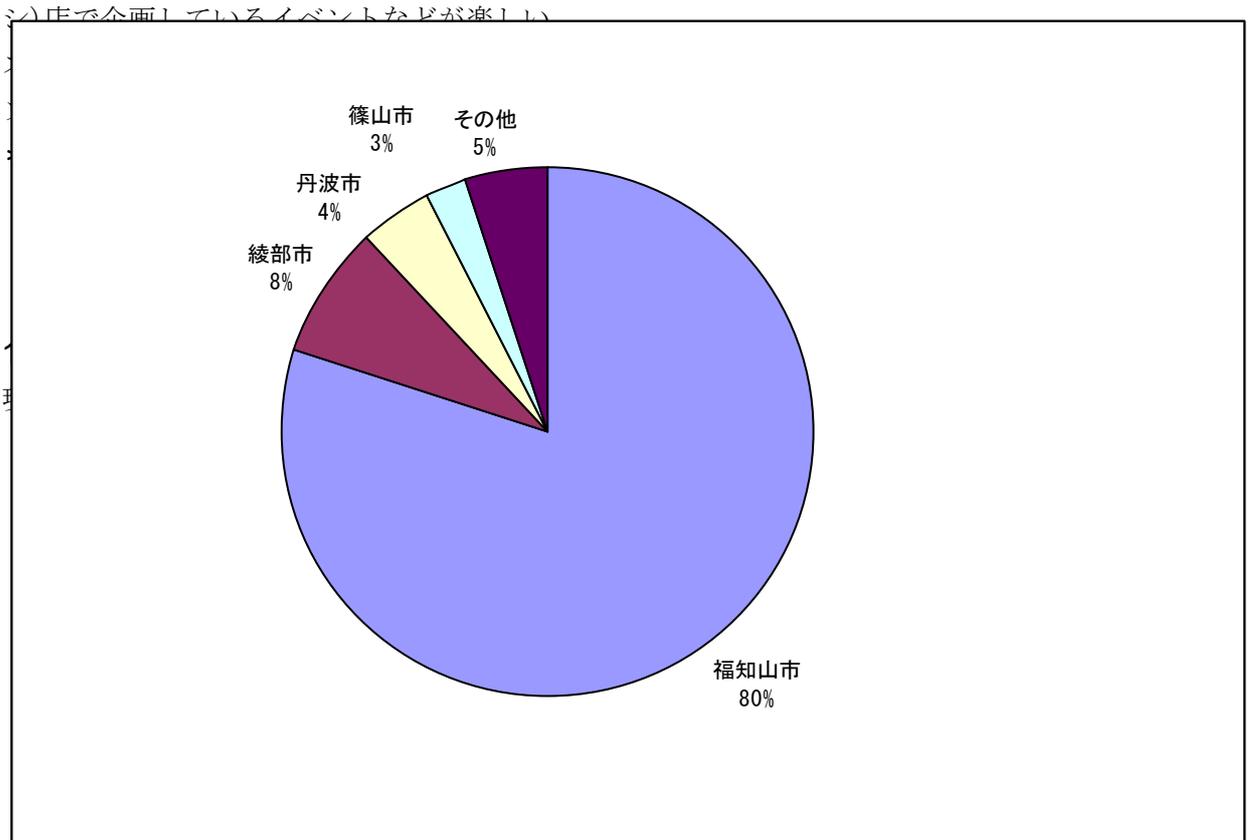


図 1. 現住所

持ち家比率は、福知山市  $231/355=65.1\%$ 、綾部市  $11/47=23.4\%$ 、全体  $325/681=47.7\%$ であるので、福知山市の持ち家比率が全体よりも高い。

通勤時間の平均値は、表 1 の通り。

表 1 通勤時間

現住所	通勤時間[分]
福知山市内	13.2 分
綾部市内	24.7 分
舞鶴市	51.9 分

与謝野町	51.7 分
篠山市	48.7 分
三田市	71.9 分
丹波市	29.4 分
朝来市	47.5 分
豊岡市	57.5 分

福知山市内からの通勤時間は 20 分未満が多く、近隣からの通勤の多いことが分かる。また、車で 5 分等の記述があり、社宅や寮からの通勤が多いものと思われる(図 2)。

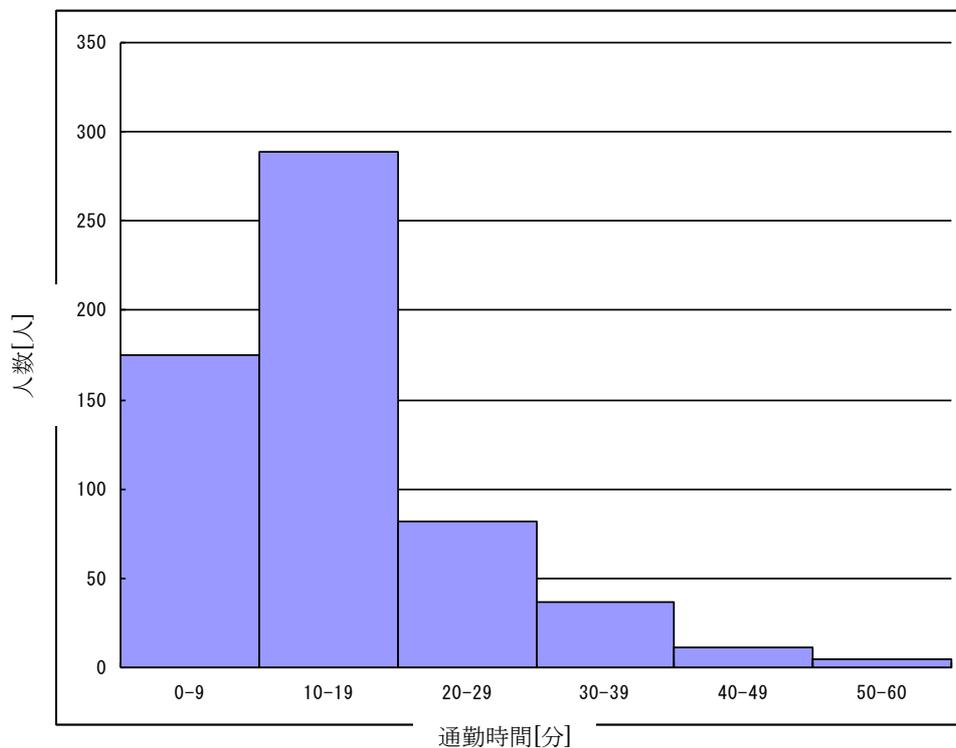


図 2. 通勤時間の分布

表 2 前住所との一致

住所	一致数
福知山市	401
綾部市	52
丹波市	26
篠山市	11
舞鶴市	6
与謝野町	6
三田市	5

近隣市町村からは自宅からの通勤者が多いようである。

一方、福知山への転入は大阪市、京都市が多く、宇都宮市や小田原市といったところが複数あることから、長田野企業の本社等関連のある地域からの転入があるものと思われる。

表 3 福知山市への転入

前住所	件数
大阪市	14
京都市	13
綾部市	8
神戸市	8
丹波市	8
高槻市	7
吹田市	7
宇都宮市	6
小田原市	5
舞鶴市	5

## 2. 設問のまとめ

### 2.1 居住地を選ぶうえで重視する項目

順位	項目
1	ア) 職場に近い
2	オ) 買い物の利便性が高い
3	カ) 水害等・災害のリスクが少ない
4	イ) 両親など他の家族との同居ないし近くに住むこと
5	ウ) もともと住んでいた地域であること

### 2.2 福知山市に欠けているもの、それがあれば居住したくなるもの

順位	項目
1	ア) より便利なショッピングモール
2	オ) 娯楽施設
3	ウ) 美味しい飲食店
4	ソ) 安価な土地や住宅
5	ケ) アスレチックやプールなどのスポーツ施設

### 2.3 店の選択で重視する項目

順位	項目
----	----

1	ウ)商品が優れている(おいしい)、あるいはその店の商品に信頼感がある
2	ア)価格が安い
3	エ)車で行きやすい
4	オ)駐車場が広い
5	ケ)店の雰囲気が良い

ただし、「ア)価格が安い」を1番目とする回答が最も多いため、総合点の重み付けを検討する必要がある。

アンケート結果の詳細な解析については、別途学術誌に論文として投稿する予定である。ここでは、簡単にこれらの結果が示唆するものをまとめると、

- 1) 多くの人が居住地を決める上で重視する項目は、職場に近い、買い物の利便性が高い、水害等・災害のリスクが少ない、両親など他の家族との同居ないし近くに住むこと、もともと住んでいた地域であることといった基本的には生活の利便性や安全性といった事項である。
- 2) また多くの人が、商業施設に求める項目は、商品が優れている(おいしい)、あるいはその店の商品に信頼感がある、価格が安い、車で行きやすい、駐車場が広い、店の雰囲気が良いといったもので、ほとんどは9号線沿線にできて大手のチェーン店や大型店舗が得意とする項目である。
- 3) 実際に、居住の引き金となる項目についても、商業施設に関係するところをひろくと、より便利なショッピングモール、娯楽施設、美味しい飲食店、アスレチックやプールなどのスポーツ施設などと、これも基本的には大資本系の大手のチェーン店や大型店舗が得意とする項目である。

従って、旧商店街の特徴である、古い町並み、人の距離が近い、文化的(どっこいせ踊りなど)蓄積といった項目は、長田野工業団地の人々にとっては、あまり気にならないものであることがわかる。おそらく、福知山市に古くから居住する市街地の人々や、現在仕事や子育てから離れているシニヤ層では、かなりちがった傾向が出てくる可能性はある。しかし、このアンケートで分かったことは、福知山市の人口を、数人ないし数十人レベルではなく、数百人ないし数千人レベルで維持・獲得していくための定住化・移住化のためには、生活の利便性や安全性といった面からの環境整備が最も重要であり、旧商店街の再活性化に結びつくような要素はあまりない、という事実である。これは、当初筆者らが考えた仮説とは違った結果であるが、事実として受け止めていく必要がある。

#### 4. 2. 伝統工芸体験ツアーに関するアンケート調査

伝統工芸の体験型研修ツアーについて企画を立て、その企画の有効性についてアンケート調査を都市部(東京)で行った。

これは、福知山市の貴重な伝統文化資源としての、大江二俣和紙、夜久野町漆工芸、福知山市藍染めなどについて、他の地域の人間特に大都市圏の人々がどのような興味を持つ

か、これらが福知山市の観光資源としての可能性を持たないか、といった調査である。

今回は、特に、東京でリストラなどにあい就職先を探している30代のデザイン関連志向の人々30人を対象に調査を行い、たとえ現在所得が無くとも興味の志向性が合えばこうしたものへ興味を持つかといった調査から、現在福知山市で殆ど観光資源として活用されていないこれらの文化の持つ潜在的な可能性を探り、福知山市への観光の新たな可能性を模索するものである。アンケートの内容は以下のとおりである。

\*\*\*\*\*

#### 伝統工芸週末体験ツアーアンケート調査 2018.1.4

実施主体：福知山公立大学平野研究室、協力：京都府福知山市役所文化振興課

京都郊外の福知山市には、伝統工芸である和紙、漆、藍染を、原材料の植物の育成から行っている職人さんたちがいます。こうした伝統工芸の技法について、簡単な実習も含めた研修旅行のツアーを企画していますので、あなたの率直なご意見をお聞かせください。（匿名で結構ですし、答えたくない方は結構です。このアンケートは、企画の立案に参考にさせていただくので、回答者個人の個人情報に関しては何も漏れる心配がないことをお約束いたします。）

\*ツアーの例示（参考まで）

週末土日の2日間で、京都郊外の職人の家で伝統工芸の技術を実習する。

1日目午前：移動（東京ないし大阪から福知山へ）

午後：伝統和紙の講習と手漉実習

夜：職人/農家/地元の家に民泊

2日目午前：伝統漆の講習と蒔絵実習

午後：伝統藍染の講習と染め実習

夕方：移動（福知山から東京ないし大阪へ）

次のアンケートで、該当する答えの番号に丸をつけてください。

問1. 短期間に、京都郊外の福知山で3つの伝統工芸の基礎技術を実習できるという企画は、あなたにとって魅力的ですか？

- (1) かなり魅力的
- (2) やや魅力的
- (3) どちらとも言えない
- (4) やや魅力に乏しい
- (5) 全く魅力がない

問2. 内容として、一つの技術を深く研修したいか、3つの技術を浅くでも一応研修したいか、どちらでしょう？

- (1) 一つの技術を深く研修したい
- (2) 3つの技術を浅くでも一通り研修したい

問3. もっとも研修したい技術は、あえて選ぶとするとどれですか？

- (1) 和紙漉き



リング・ツアーを企画した。

実施時期：2018年3月3日（土）4日（日）の2日間（1泊2日のツアー）

対象者：東京在住の各界識者、4名

A: 30代デザイナー、特に若い世代に友達が多い

B: 40代写真家、各界へのチャンネル多い

C: 50代起業家、会社役員、観光産業に知見有り

D: 60代音楽業界関係者、芸能界へのチャンネルあり

概要： 1日目：主として東京から新幹線、特急で昼には福知山に着く

午後は、由良川藍染研修、夕方明智城観光

2日目：午前は夜久野町の木と漆の館にて、蒔絵の研修

途中、漆掻き職人と漆林見学

午後は大江町和紙伝承館にて手すき和紙研修

夕方、福知山を出発し、東京着。

下記に研修の様様を写真で示す。



図1. 藍染研修（絞染め）



図2. 漆研修（蒔絵）



図3．漆掻きの説明（漆の林にて）



図4．和紙研修（紙漉き）

このモニタリングツアーの結果についても、詳細は学術論文化するのでは、ここでは以下に概要を述べる。

- 1) 体験研修の内容については、どの工芸についても、全員が非常に満足度が高く、感動している様子がみてとれた。総合評価も、満足度10点満点で平均値8.9とかなり高いものであった。また、漆掻きの現状など、伝統工芸の抱える問題についてはほとんどの人が知らなかったということで、情報の発信のためにも、こうした体験ツアーが有効であった。
- 2) 構成的には、東京からの往復も含めて2日で3種類の研修はさすがにハードであったようで、前回実施したアンケート調査でのコメントにもあったが、むしろ時間をかけた研修を望む声があった。
- 3) 実施人数としては、4～6人程度が良いと感じていること、ガイド付きがいいというコストが増える方向での希望もあったが、逆にツアーの価格に対する値ごろ感に対しては、全員の考えている最適価格が、実質原価以下であり、事業としては逆鞘になりかねないのであった（交通費を別として、1泊の宿泊費と食事代、研修の材料費、研修費を込みで、

15000～20000 円というアンケート結果)。前回のアンケート調査では、就職活動中の人が対象であったので、値ごろ感がやはり同程度の低めであったが、今回仕事を持っている人でもほとんど同じ値ごろ感であったことは、こうしたものに対する消費者の出資金額の絶対値が、ある程度の制約をもっているのではないかと推測される。従って、今回の企画を踏襲したようなパッケージ型のツアープランでは収益に結びつかない可能性が高い。

4) 上記を勘案すると、今回は週末の 2 日で福知山の伝統工芸をすべて体験するというパッケージで行ったが、むしろパッケージ化を止め、1 種類の体験ツアーで 5～6 時間(半日)かけた長めの研修を各分野ごとに用意し、そのかわりに個別研修費用を現状の 5 倍程度にするとか、あるいは思い切って夏休みの 1 週間に民泊に泊まりながら 1 種類の工芸を少し本格的に極めるような研修の提案などが考えられる。宿泊や交通費を自力でパッケージ化して商業的な観光ツアーにすることは、収益性を考えるとあまり適さない可能性が高い。この辺の可能性については、今後さらに新たなアンケート調査を重ね、企画の絞り込みを行っていききたい。また、逆に、自立型の事業化ではなく、他との連携によるシナジー効果を狙って、企業などが考えている海外のインバウンド観光の富裕層向けの企画の中に位置付けるとか、中学校や高校などの研修などに結びつけるといった可能性については、引き続き具体的な検討を行う。

5) 今後の可能性としては、民間企業の考えている広域インバウンド観光のなかに組み入れるとか、他の観光プログラムの付加価値向上に結びつけるなど、個別採算型でない収益化の可能性について検討してみる予定である。産業としては廃れかけている伝統工芸であるが、様々な因子と掛け合わせていくことで、広く展開できる可能性がある。伝統工芸が、様々な形で地域の資産として、活用されていくことを期待している。また、このことが中心市街地の旧商店街を活性化する一つのきっかけとなることを期待する。

#### 4. 4. 分析と考察

##### (1) 長田野工業団地でのアンケート調査のまとめ

外部からの移住者が多い長田野工業団地の従業員約 1100 名へのアンケート調査の結果は、居住する地域の商業に対する要求としては、利便性の高い国道沿いの大店舗へ向けた需要が圧倒的に高く、それ以外の旧商店街が活躍できそうな文化的な面などに対してはあまり求めるものはあまりない、という厳しい結果となった。

アンケート結果は、ある意味では非常にドライな形で現代の移住者を呼び寄せるための地域作りについての示唆を与えている。すなわち、基本的には、近代的な生活の利便性保障であり、おそらくは福利厚生などもこれにつぐものであろう。こうした基本的な生活インフラを整備していくことが、ある意味、税収を確保し、人口減少を抑制していくための方策として重要だということであろう。自治体の町づくりや商業政策に、ひとつのヒントとなる結果であると考えられる。

一方、文化面への興味が薄いことについては、現時点では移住者からの視点では旧商店街の再興は商業的のみならず文化的にもかなり難しいということを示唆する結果となった。今後、古くからの福知山市民、中心市街地付近の居住者からのヒヤリングにより、内部か

らの再生の可能性について検討を進めたい。

### (2) 伝統工芸体験ツアーに関するアンケート調査のまとめ

一方、外部者にとっての福知山の魅力を大きなものとし、交流・観光人口を増やしこれによって間接的に中心市街地の活性化につなげるため、福知山の伝統工芸である和紙、漆、藍染などを、観光資源として用いる可能性について、体験型の研修ツアーを企画し、東京でデザイン関係者 30 名にアンケート調査を行った。その結果、興味を持つ人間が約 8 割と多いことがわかった。

この結果を受けて、福知山市役所文化振興課からの委託研究として、別途予算をいただき、工芸体験のモニタリングツアーを実施した。東京在住の、音楽業界関係者、写真家、起業家（会社役員）、デザイナーなど 4 名の識者に、土日の 1 泊 2 日で、福知山の由良川藍染、夜久野丹波漆、大江二俣丹後和紙の 3 種の伝統工芸の体験研修をしてもらうツアーである。実施した結果、各体験研修については非常に好評で、ツアーの全体評価も、10 点満点で平均 8.9 点というものであった。従って、こうした体験型ツアーをうまく観光の中に組み入れていけば、福知山市への交流人口増加に結びつけていける可能性がある。

今後こうした観光を具現化し、商店街の中に観光サービスの拠点をつくることなどで、交流人口促進の方向から間接的に商店街の活性化に多少なりとも結びつけていくことが期待される。この検討の一部は本学紀要 2017 年度版にて報告される。またその後の継続検討についても、順次報告していく予定である。

### (3) アンケート結果から言えること

長田野工業団地でのアンケートの結果は、ある意味では非常にドライな形で現代の移住者を呼び寄せるための地域作りについての示唆を与えている。すなわち、基本的には、近代的な生活の利便性保障であり、おそらくは福利厚生などもこれにつぐものであろう。こうした基本的な生活インフラを整備していくことが、ある意味、税収を確保し、人口減少を抑制していくための方策として重要だということであろう。自治体の町づくりや商業政策に、ひとつのヒントとなる結果であると考えている。

一方で、伝統工芸に関するアンケートやモニタリングの結果は、伝統工芸の観光資源としての可能性を示唆しており、要するに、人々は、日常の生活や移住定住には利便性を求め、非日常の観光や交流には文化などの要素を求める、ということではないかと推測される。こうした傾向がどこまで普遍的なものかはまだ不明だが、中心市街地問題を考える上でも、ひとつのヒントになることは間違いない。

今回の調査は、地域の居住人口確保ないし定住促進という立場からは、近代的な生活面からの利便性確保が重要であり、一方、外部からの交流促進や観光という立場からは、文化的資源が重要である、という側面を浮き彫りにした。従来、混在した視点で語られがちであったこれら 2 つの問題を明確に区別して考える必要があるということ、今後、中心市街地の活性化問題と絡めて、観光など地域の産業形成などの広い視野の中で、この問題をさらに深耕していきたい。

現時点でこの結果を中心市街地問題に引きつけて考えると、中心市街地の商業的な再興

については、いわゆる大店舗などの利便性と直接競合するような方向ではなく、むしろ非日常の観光などに結びつけた独自の方向を目指すほうが得策と考えられる。そのためには、商店経営を続ける人にとっても、その方向性を個店ごとに再考してみる必要があるかもしれない。あるいは、商業的な再興だけでなく、福祉や市民交流という立場などから、新たな中心市街地設計を考えてみるのもいいかもしれない。今後、実際の商店街の商店主の方々の意見や思いもヒヤリングしながら、大学としてどのような協力ができるのか考えていきたい。

#### 4. 5. 結論と今後の課題

福知山市中心市街地商店街の再活性化に向け、活性化手法を検討した。研究の着眼点としては、商店街に対する消費者側の視点として、特に外部からの移住者にはまちづくりに関してどのようなニーズや要望が有るかを調べるということ、そのことに移住者や定住者を増やすという観点からは、中心市街地問題がどのように映るのか、といった問題を考えたことである。

##### (1) 長田野工業団地におけるアンケート調査

外部からの移住者が多い長田野工業団地の従業員、アルバイト職員総勢約 6300 人に対し、事務所の入り口などにアンケート用紙をおいて記入を呼びかけることで、約 1100 名からの回答を得た。

アンケート調査の結果、居住する地域の商業に対する要求としては、利便性の高い国道沿いの大店舗ショッピングモールへの需要が圧倒的に高く、それ以外の文化的な面などで旧商店街の需要につながるような要求は残念ながら特になく、という厳しい結果となった。これは、長田野工業団地の従業員は、当然退職したシニア層などは含まれておらず比較的若い世代で子育てなどに追われており、こうした世代にとってはまず何といても生活の利便性が重要である、ということではないかと考えられる。詳細な調査結果と分析は今後学術論文などの形で報告していく。

いずれにせよ、今回のアンケート結果は、現時点では「移住者からの視点」では旧商店街への直接的な需要としては商業的のみならず文化的にもかなり難しい（需要が感じられない）ということを示唆する結果となった。今後、古くからの福知山市民、中心市街地付近の居住者からのヒヤリングにより、内部からの再生の可能性について検討を進めたい。

##### (2) 伝統工芸ツアーに関するアンケート調査、およびモニタリング

一方で、外部者にとっての福知山の魅力を大きなものとし、交流・観光人口を増やしこれによって間接的に中心市街地の活性化につなげるため、福知山の伝統工芸である和紙、漆、藍染などを、観光資源として用いることを考えた。その可能性について、例えば体験型の研修ツアーを企画し、東京でデザイン関係者 30 名にアンケート調査を行った。

結果をまとめると、企画した工芸体験ツアーには、予想以上に8割以上の人々が興味を示した。この結果を受けて、実際に工芸体験のモニタリングツアーを実施した。東京在住の各界識者4名に、土日の1泊2日で、福知山の由良川藍染、夜久野丹波漆、大江二俣丹後和紙の3種の伝統工芸の体験研修をしてもらうツアーを行った。実施した結果、非常に好評で、ツアーの全体評価も、10点満点で平均8.9点というものであった。

今回の調査結果は、地域の居住人口確保ないし定住促進という立場からは、近代的な生活面からの利便性確保が重要であり、一方、外部からの交流促進や観光という立場からは、文化的資源が重要である、という側面を浮き彫りにした。従来、混在した視点で語られがちであったこれら2つの問題を明確に区別して考える必要があるということ、今後、中心市街地の活性化問題と絡めて、観光など地域の産業形成などの広い視野の中で、この問題をさらに深耕していきたい。

(なお、本研究のうち、伝統工芸のモニタリングツアーに関する部分は、福知山市役所文化振興課から別途予算により研究委託を受けたものであるが、結果について、市のご好意により本報告に併記した。)

## 5. 本研究成果による発表論文等

- 長田野工業団地でのアンケート調査に関する調査報告、および伝統工芸体験ツアーに関する調査報告：  
神谷、平野、中尾  
「地域への移住・定住・交流促進と中心市街地問題：アンケート調査による考察」（仮題）  
日本観光学会学術誌に投稿予定。
- 福知山伝統工芸の観光資源化に関する調査報告：  
平野、中尾、神谷「福知山市伝統工芸の観光資源化(1)-地域の無形資産活用の試み-」  
2017年度福知山公立大学研究紀要（2018年4月刊行予定）、HP公開予定。

## 6. 参考文献

- (1) アカリ・シリーズ（株式会社 YAMAGIWA）  
<https://shopping.yamagiwa.co.jp/Isamu+Noguchi>（イサム・ノグチ）「AKARI」（ランプ別）%5BF-206%5D/product/0/F-206/?cat=200012&swrd=（2018）
- (2) 「阿波藍 X 未来形」プロジェクト、阿波藍の歴史、<http://awa-ai-saiko.com/ai.html>  
（2018）
- (3) 中部経済産業局、中部地域における産業観光インフラ整備に関する調査、（2003）
- (4) 福知山市役所文化振興課八瀬正雄氏提供資料（2017）
- (5) Fujita, M., P. Krugman, A. J. Venables, The Spacial Economy: Cities, Regions, and International Trade, The MIT Press, 1999, 小出博之訳、空間経済学：都市・地域・国際貿易の新しい分析、東洋経済新報社（2000）

- (6) 濱満久、商店街における商業集積のマネジメント、名古屋学院大学論集社会科学編、第 51 巻、第 4 号、pp. 105-118、(2015)
- (7) 東俊之「伝統産業振興と地域活性化の関係性について」金沢工業大学日本学研究、第 16 号、pp. 220-240、(2013)
- (8) Hirano M., Regional Development through Ecological Businesses: Unique cases in Japanese rural regions, Routledge, London, UK, (2016)
- (9) 平野真、地域協働型 PBL 教育-福知山公立大学での事例を通して、福知山公立大学研究紀要、(2016)
- (10) 池上惇、文化と固有価値の経済学、(2003)
- (11) 池田寿、紙の日本史、勉誠出版、(2017)
- (12) 石倉洋子他、日本の産業クラスター戦略、有斐閣、(2003)
- (13) 石原武政、小売業の外部性とまちづくり、有斐閣、(2006)
- (14) 石原武政、まちづくりの中の小売業、有斐閣、(2000)
- (15) 石井淳蔵 (1989)、小売所遊行における企業家行動の条件、組織科学、Vol. 22, No. 4, pp26-34
- (16) 加藤寛監修、日本の漆工、東京美術、(2014)
- (17) 加藤司 (2003)、流通理論の透過力、千倉書房
- (18) 経済産業省、平成 27 年度製造基盤技術実態等調査報告書、(2016)
- (19) 経済産業省製造産業局伝統的工芸品産業室、伝統的工芸産業をめぐる現状と今後の振興施策について、(2011)
- (20) 北山幸子ほか (2016)、AR を利用した地域活性化-センチメンタルな価値再生へ向けて、整備大学起用 第 6 巻、第 1 号、pp. 43-53
- (21) 高知工科大学起業家コース、我らダイヤモンド企業、丸善出版、(2008)
- (22) 熊野谿従、漆のお話、文芸社、(2012)
- (23) Marshall, A, Principles of Economics, Macmillan, (1890) 馬場啓之助訳、経済学原理、東洋経済新報社、(1966)。
- (24) Mrc, P., Une aventure au quotidien, (2006) 丸尾敏雄監修、紙の歴史、創元社、(2006)
- (25) 未来工学研究所、伝統的工芸品産業調査報告書平成 20 年度、(2009)
- (26) 日本銀行金沢支店、ほくりくのさくらレポート、2012 年 2 月 23 日、  
<http://www3.boj.or.jp/kanazawa/kouhyou/report/report.htm> (2018)
- (27) 日本建築学会編、新市街地活性化とまちづくり会社、丸善出版、(2005)
- (28) 西村正芳、福知山市の商工業、福知山公立大学講義レジメ、(2016)
- (29) Porter, M.E. (1990), The Competitive Advantage of Nations, The Free Press, 土岐まもる他訳、国の競争優位性 (上、下)、ダイヤモンド社、(1992)
- (30) 奥田耕一、中部圏における漆器産業について、金沢大学経済論集、第 20 巻、pp. 21- 35、(1983)
- (31) 小畑登喜夫、手漉和紙産業による光と影、近創史 No. 14, pp. 20-349、(2012)
- (32) 長田野工業センター、長田野工業団地の概況、(2016)
- (33) 野中郁次郎・竹内弘高、知識創造企業、東洋経済新報社、(1996)

- (34) Penrose, E., *The Theory of the Growth of the Firm*, Oxford Univ. Press, (1995)、  
日高千景訳、企業成長の理論、ダイヤモンド社、(2010)
- (35) Porter, M.E., *The Competitive Advantage of Nations*, The Free Press, (1990) 土  
岐まもる他訳、国の競争優位性 (上、下)、ダイヤモンド社、(1992)
- (36) Putnam R., *Making Democracy Work*, Princeton University Press, (1993), 河田潤一  
訳、哲学する民主主義-伝統と改革の市民的構造、NTT 出版、(2001)
- (37) Saxenian, A. J., *Regional Advantage: Culture and Competition in Silicon Valley  
and Rout 128*, Harvard University Press, (1994) 大前研一訳、現代の二都物語、講  
談社、(1995)
- (38) Vernon, R., ‘International investment and international trade in the product  
cycle’, *Quarterly Journal of Economics*, 80 (2), 190-207, (1966)
- (39) 四柳嘉章、漆の文化史、岩波新書、(2009)